朱彝尊の「斎中読書十二首」（其十一）について

谷口匡

一、序

清初の詩人朱彝尊（一六二九～一七〇九）の作詩活動を考える上で、彼が康熙四十三年（一七〇六）、七十六歳の時に作った「斎中読書」と題する十二首の連作[1]、とりわけ「詩篇雖小技」という一句で始まる十一番目の詩（以下「其十一」と略記する）は甚だ重要な作品である。

そこには詩はいかに作られるべきかということに関する朱自身の考えがまとまって述べられており、かつ、それは年齢的にいっても、彼が一生かかって到達した最終的な結論であると考えられる。この一連の詩は「斎中に書を読む」という題名から窺えるように、書斎での読書における気ままな感想を書きつけたものであって[2]、「其十一」に述べられている主張はそのまま朱の詩論として受け取ってよいものであろう。

本稿では朱彝尊の「斎中読書十二首」、特に「其十一」の具体的所説について問題点を明らかにし、他の十一首を視野に入れながら、当時にあってこのような詩がなぜ作られたのかを考えてみたい。(3)

二、「其十一」について

「其十一」は、五言で計二十六句からなる比較的長い作品であり、はじめに、その大体の内容を五つの部分に分けて概観しておくこととする。

まず、第一～第四句は、朱の詩学の根本的な立場を宣言する部分で、

詩篇雖小技　詩篇は小技と雖も
其源本経史　其の源は経史に本づく
必也万巻儲　必ずや万巻の儲(たくわ)えありて
始足供駆使　始めて駆使に供するに足る

というように、詩は経学と史学の学問を根底に持つもので、しかもそれらの学問は万巻の蓄積があってはじめて自在に用いられて一つの詩となることを述べる。

第二に、第五～第十句は、詩と学問とは関係しないとする宋の厳羽の説を批判する部分で、

別材非関学　別材ありて学に関するに非ずとは
厳叟不暁事　厳叟は事を暁(さと)らず
顧令空疎人　顧(かえ)って空疎の人をして

著録多弟子　著録　弟子多からしむ
開口效楊陸　口を開けば楊陸に效い
唐音総不歯　唐音は総て歯せず

といい、厳羽の説がもととなって、学問のない人に弟子が大勢集まるようになってしまい、楊万里や陸游の真似をするばかりで、唐詩を軽蔑する近ごろの状況が生まれた、とする。

第三に、第十一～第十六句は、宋詩に対する日頃の考えを披露する部分で、

吾観趙宋来　吾れ観る趙宋よりこのかた
諸家匪一体　諸家は一体に匪ず
東都導其源　東都　其の源を導き
南渡逸其軌　南渡　其の軌を逸す
紛紛流派別　紛紛として流派別れ
往往近麁鄙　往往にして麁鄙なるに近し

と述べて、北宋に諸家それぞれの詩のスタイルが生まれ、宋詩の源流ができあがったが、南宋に入るとそうしたスタイルを逸脱し、次々と流派ができて、粗野で俗っぽい詩風に堕落していった、との認識を示す。

第四に、第十七～第二十句は、宋詩人を弁護する部分で、

群公皆賢豪　群公皆な賢豪にして
豈尽昧厥旨　豈に尽く厥の旨に昧からんや
良由陳言衆　良に陳言衆きに由って

蹈襲乃深恥　　蹈襲は乃ち深く恥ず

と歌い、賢明な宋詩人たちは、詩の原理をよく理解しており、古臭い表現の氾濫に閉口し、形式的な模倣を恥としていたのだと説く。

最後に、第二十一～第二十六句は、同時代の詩人たちが形式的な模倣に明け暮れることに対して反省を求める部分で、

云何今也愚　　云に何ぞ今や愚かにして
惟践形迹似　　惟だ形迹の似たるを践まん
譬諸芍蔗甘　　諸を芍蔗の甘きに譬うれば
舎漿噉渣滓　　漿を舎てて渣滓を噉うがごとし
斯言勿用笑　　斯の言用って笑う勿かれ
庶無乖義始　　庶わくは義始に乖ること無かれ

と結んで、そのような作詩の方法は、砂糖きびに喩えれば甘い汁を捨ててかすだけ食べているようなものであり、自分の述べてきたことに耳を傾けて、『詩経』以来の詩のそもそもの原理に立ち返るよう促している。

三、「其十一」に対する批評について

「斎中読書十二首」は、朱彝尊の詩の中でも比較的注目されてきたものであって、「朱の全集中の第一で、清朝三百年の詩の第一でもある」[4]という批評は大袈裟であるにしても、「平生の学問についての根本理念を窺うことができる」[5]

作品であることは確かであろう。

十二首のうち、最も取り上げられるのは、やはり「其十一」である。この詩についての批評を見れば、厳羽の説を批判した作品であるという点では、諸家ほぼ一致している。厳羽の説とは、『滄浪詩話』詩弁篇に見える「夫れ詩には別材有り、書に関するに非ざる也。詩には別趣有り、理に関するに非ざる也」という、作詩にあたっては、「別材」、すなわち詩人としての特別な才能や「別趣」、すなわち特殊な味わいを重視し、「書」、すなわち学問や「理」、すなわち真理には関係しないとする、はなはだ有名な詩論であるが、朱のこの詩ではこれに反対し、学問の大切さを説いたとされる。

こうした観点での発言として最も早いのは、管見では銭大昕（一七二八～一八〇四）の「甌北集の序」[6]で、そこでは厳羽の説と朱の「其十一」を引用した上で、次の如く言う。

二家の論はかみ合っていないに等しく、思うにどちらも一つの点の重要さのみを意識し、二つの点を同時に重視することを知らない。厳羽は詩を禅に喩え、詩の流派にこだわって、その異同を比較し、詩人の系統による区別が、実はここからおこった。しかし、彼のいう「特別な才能」「特殊な味わい」を究める者は、ただ壁を眺めてばかりで書物を読まないから、もとより本物の感性が具わるわけでもなく、しだいに空疎で学問をしようとしない悪習に染まっていった。個々の詩を見れば、時にあやのある美しさが存しないではないが、全集を繙くに及んで、すぐ尽きてなくなってしまう。朱彝尊が詩は必ず経史の学問に基づかねばならないというのは、杜甫が「一万巻の書物を読み、筆を取れば不思議な趣きが現れる」（「奉贈韋左丞丈二十二韻」）というのと実に合致しているが、生来の才能やすぐれた情趣に乏しいままに学問を駆使すれば、表現は華やかでも趣きがともなわず、どうしてそれで、参考書を並べている、古人の名前ばかり出てくる、ひぜんができた駱駝のようだ（＝美しくない喩

え）、学識をひけらかしている、といった汚名を雪ぐことができよう。

（二家之論、幾乎枘鑿不相入、予謂皆知其一而未知其二者也。滄浪比詩於禅、沾沾於流派、較其異同、詩家門戸之別、実啓於此。究其所謂別材別趣者、只是依牆傍壁、初非真性情所寓、而転蹈於空疎不学之習。一篇一聯、時復斐然、及取其全集読之、則索然尽矣。秀水謂詩必原本経史、固合於子美読書万巻、下筆有神之旨、然使無真材逸趣以駆使之、則藻采雖繁、臭味不属、又何以解祭魚点鬼疥駱駝掉書袋之誚乎。）

ここでは厳羽の説も朱の説もいずれも不完全なものとして捉えられているといえる。

これに対して、林昌彝（一八〇三～七六）は、厳羽の説について、詩作の上で「別材」「別趣」の必要を主張するのは正しいが、「学」や「理」は関係ないとするのは誤っているとし、その立場から、朱の「其十一」は詩を作る者のあり方をよく心得ていて、見識ある言だと述べる。[7] しかし、楊鍾羲（一八六五～一九四〇）が指摘するように、厳羽の説は「……しかしながら多く書物を読み、多く真理を究めることなしには、最高の境地には到達できない」（然非多読書、多窮理、則不能極其至）とも言っており、決して一概に学問を否定しているのではない[8]ことを考慮すれば、朱の論は、厳羽の説のある一面だけを取り出して批判したものにすぎないと見なすことも可能であろう。[9]

それでは朱は厳羽の説の一方を見落としたのであろうか。結論から言えばそれはあり得ないことであって、彼はあくまでも厳羽が学問を全く否定しているのではないことを知りつつも、やはり「別材」の論を否定せざるを得なかったのではないだろうか。では、詩は特別な才能によるのか、学問によるのか、という創作の根本に関わる問いに対し、朱彝尊はなぜ学問という答えを出しているのか。

私は、こうした問題意識から、もう一度この「其十一」の詩を読み直してみたいと思う。今、そのための一つの作業として、さしあたり詩全体の解釈に関わる問題点のみを拾い出すならば、第七句の「空疎」とは具体的にどのよう

な事態を指すか、第十四句の「逸其軌」とは何を意味するか、第十七句の「群公」はどのような範囲の人を指すか、といった諸点があげられる。こうした問題を明らかにしてはじめて、この詩の詩論としての意味もはっきりとしてくると思われるのである。以下、これらの点について順次論じてゆくこととする。

四、「空疎」について

「空疎」の語は、厳羽の説を批判する第二の部分の中に現れる。

厳羽は、そもそも詩には特別な才能が必要でそれは書物に関係したことではないと述べて、「詩」と「書」（＝学問）の関係を分離させて考えたが、このようにいう彼は事の本質がよくわかっていないというのが、「別材ありて学に関するに非ずとは、厳叟は事を暁らず」という第五、六句である。「空疎」の語そのものの意味は、端的にいえば学問がないということで、第七、八句の「顧って空疎の人をして、著録、弟子多からしむ」は、厳羽の説が学問のない人に多くの弟子を持たせてしまった、という現実を述べるものである。[10]

さて、この詩の翌年、康熙四十四年（一七〇五）[11]に書かれた「棟亭の詩の序」（『曝書亭集』巻三十九）において「今の詩人が空疎浅薄なのは、みな厳羽の『詩には特別な才能が必要で、学問には関係しない』という言葉がそのもとを開いたのである」（今之詩家、空疎浅薄、皆由厳儀卿詩有別才匪学一語啓之）と朱は述べ、「其十一」とほぼ同じ主張を繰り返している。そして、ここでは彼は同時代の詩人に対して「空疎」の語を用いる。

一般に朱が同時代の詩人に言及して「今の詩人」「近ごろ詩について論ずる人たち」などと言う時、それは、唐詩を嫌って宋詩を第一とする一派を指すことが多い。[12]彼は当時の宋詩流行の風潮に反発したが、それは宋詩を支持する

一派が狭い範囲にモデルを限定し、言葉の上だけの形式的な模倣に終始したからであった。「空疎」つまり、学問を根底としておらず空っぽだというのは、彼の場合、そうした状態を批判した言葉である。

また、制作年代は不明ながら、「胡永叔の詩の序」（『曝書亭集』巻三十九）の中でも「空疎」の語は使われている。すなわち、「明の万暦年間以来、公安の袁公道兄弟は嘉靖年間の七詩人の弊害を正し、白居易・蘇軾、下っては楊万里・陸游を尊重したが、その表現と感情は、ひどく害をもたらすには及んでいない。竟陵の鍾惺・譚元春は、この主張の上に立って更にそれを徹底し、もっぱら空疎浅薄をよしとする立場から奇怪を好み、初学者に便を図り、その結果、筆を執る者は必ずしも書物を読み、字を知ろうとしなくなった。この害は計り知れないものがある」（自明万暦以来、公安袁無学兄弟、矯嘉靖七子之弊、意主香山眉山、降而楊陸、其辞与志、未大有害也。景陵鍾氏譚氏、従而甚之、専以空疎浅薄、詭譎是尚、便于新学小生、操奇觚者、不必読書識字、斯害有不可言者已）とあって、この場合は明末の鍾惺・譚元春らいわゆる竟陵派の詩人の立場を「空疎」と言っている。

そして、朱の晩年期の作と思われる「荇谿詩集の序」（『曝書亭集』巻三十六）を見れば、二十代の頃を回想して、「当代の詩人たちが、竟陵の鍾氏・譚氏の学説を祖述しているのを見て、内心これを憎み、ただ亡国の音にすぎないと思った」（見当代詩家、伝習景陵鍾氏譚氏之学、心窃非之、以為直亡国之音爾）と、当時竟陵派の影響を受けた人たちがいたことを述べるが、さらに『静志居詩話』巻十八の徐煽の条で、「厳羽は詩を論じて、『詩は特別な才能によって作られるもので、学問とは無関係である』と言った。その発言は真理のように見えるが、学問をせずに壁を眺めてばかりいたら、詩を作れるはずがないであろう。公安・竟陵派の主張が世に行われてから、空疎な人たちはそれを根拠に不勉強の言い訳をしたが、もしかれらの主張の通りであるとしたら、杜甫は何も『一万巻の書物を読破』する必要はなかった」（厳儀卿論詩、謂詩有別才、非関学也。其言似是而実非、不学牆面、焉能作詩。自公安竟陵派行、空

疎者得以藉口、果爾、則少陵何苦読書破万巻乎）と言うのからすれば、そうした竟陵派の影響を受けた人々も「空疎」であるとされる。

このように見ていくと、「楝亭の詩の序」で、厳羽のせいで「空疎」になったという今の詩人は、同時に公安・竟陵派の影響を受けた人々でもあることがわかる。さらに言えば、「胡永叔の詩の序」以下の資料を見る時、むしろ厳羽よりも竟陵派の影響を朱は深刻に考えていたように思われる。

竟陵派に対する朱の嫌悪感は甚だしいものがあって、先に引用した「荇谿詩集の序」で「亡国の音」と謗るのなどはその一例である。この「亡国の音」というのは『礼記』楽記篇に基づく語で、そこでは音楽を上から「治世」「乱世」「亡国」の三段階に分け、人民の苦しみを反映したもの悲しい音楽を「亡国の音」とする。これを竟陵派の詩を喩えるのに用いたのは実は朱の曾祖父朱国祚（しゅこくそ）であって、『静志居詩話』巻十五の朱国祚の条に、「竟陵派の詩が世に出たばかりの時、公（＝朱国祚）はこれを見て驚き、『このような亡国の音があってよいものだろうか。私は見るに忍びない』と言った」（景陵詩派初行、公覧之、驚曰、安得此亡国之音、吾不忍見之也）とある。[13] 朱彝尊が同様に竟陵派を評するのは、曾祖父の見解を継いだものであろう。

朱がこのように竟陵派を激しく批判せざるを得なかったのは、その流行に危機感を抱いたためであろう。鍾惺と譚元春が共同で編んだ『古詩帰』十五巻、『唐詩帰』三十六巻は彼ら竟陵派の理論を具体的な詩の選集の形で示したもので、当時家ごとに一篇を備えたというほど流布したが、朱も「『詩帰』が出版されると、暫くの間紙価がはね上がった。……誰もが彼らの一言を押し頂いて標準とし、この二人の悪趣味は救いようのないものとなり、当時その声名は大いに上がって、彼らの毒が天下全体に回り、詩は亡んで国も運命を同じくした」（詩帰出、而一時紙貴、……無不奉一言為準的、入二豎於膏肓、取名一時、流毒天下、詩亡而国亦随之矣）[14] と、その目に余る流行ぶりを記している。

以上のことを総合すれば、朱が「其十一」において、「顧って空疎の人をして、著録、弟子多からしむ」という時の「空疎の人」とは主に竟陵派の人々を指し、彼らの主張が天下に広く流行し、悪弊を及ぼした、ということがこの二句の意味するところであろうと考えられる。

そうであるとすれば、ここでもう一つ考えておかなければならないのは、次の二句「口を開けば楊・陸に效い、唐音は総て歯せず」との関係である。ここに、楊万里・陸游の模倣を絶えず主張し続け、唐詩を軽視するというのは、朱と同時代の詩人たちが多くそうした立場に立っていたことを指すと思われる。このような状況はどのようにして起こったと彼は認識していたか。

『静志居詩話』巻二十一、曹学佺の条に見える彼の説によれば、明代の詩は竟陵派に至るまでに八度の変化をとげる。すなわちまだ元末の習気を残している洪武・永楽年間の諸家の詩を、まず宣徳の十子が「晩唐」風に変える（一変）。それは成化年間の諸公によって「宋」になり（再変）、弘治・正徳年間に「盛唐」になり（三変）、嘉靖の八才子によって「初唐」になり（四変）、皇甫兄弟によって「中唐」になり（五変）、かくて「古文辞派」の七子に至る（六変）。そして「（七子の時代が）長く続いたのちに公安派が〝七変〟させて楊万里・陸游の流れとしたが、その志向するところは低級であり、竟陵派が〝八変〟させ、痩せ衰えてぼんやりしたものにすると、風雅はすっかりすたれてしまった」（久之公安七変而為楊陸、所趨卑下、竟陵八変而枯槁幽冥、風雅埽地矣）というのが朱の認識である。文学史的には、反古文辞の立場から公安派が現われ、さらにそれを批判しつつ、いっそう反古文辞の色彩を強めてゆくのが竟陵派だとされるが、朱の論もそれに沿うものである。ただここで、公安派の生み出したものを楊万里・陸游式の詩とするのは、白居易・蘇軾を重んじたとする文学史の通説[15]とは異なる。

すでに見たように、「胡永叔の詩の序」では公安派について、「白居易・蘇軾、下っては楊万里・陸游を尊重した」

と述べていたが、一方で、『静志居詩話』巻十六の袁宗道の条を見れば、「袁宗道が出て、白居易・蘇軾の作詩法に習熟し、はじめて白・蘇の字をその書斎の名に冠して、公安派の源流を開いたあと、袁宏道・袁中道がこれを継承して、いよいよ時流に乗り、その結果公安派は勢力をもった。ところが、白居易・蘇軾がそれぞれ気品を具えていたにも拘らず、衰頽の趨勢はいかんともしがたく、その高潔さを棄てて、もっぱら鄙俚を尊んだ。鍾惺・譚元春はこれを一歩すすめて更に変化させ、邪悪でやかましい音にし、風雅は消えていった」（自袁伯修出、服習香山眉山之結撰、首以白蘇名斎、既導其源、中郎小修継之、益揚其波、由是公安流派盛行。然白蘇各有神采、顧乃頽波自放、舎其高潔、専尚鄙俚。鍾譚従而再変、梟音鴃舌、風雅蕩然）とあって、公安派においては彼らが規範と仰いだ白詩・蘇詩のよさが次第に失われていった、と朱が見ていたことがわかる。そのかわりに彼らがもっぱら「鄙俚」を尊んだとあるが、この「鄙俚」という語は「高潔」の逆で、いわば一般受けする通俗的な詩の一面をを指すことばのように思われる。この語は彼の別の文ではたとえば、「楊万里や鄭清之の一派は、鄙俚を美とし、……」（若楊廷秀鄭徳源之流、鄙俚以為文、……）[16]というように現われ、また上下転倒した「俚鄙」という語では、宋詩に学ぶ同時代の詩人を批判して、「次元が低くなると、楊万里のスタイルまでが模倣の対象になっており、大声でわめきたてるのを素晴らしいことと思い、俚鄙であることを正当であるかに考えている」（下乃效及楊廷秀之体、叫囂以為奇、俚鄙以為正[17]）とあって、要するに、より具体的には少なくとも楊万里の詩の通俗的な一面を指すことばであろう。したがってさきに公安派が白詩・蘇詩の高潔さを棄て、「もっぱら鄙俚を尊んだ」というのは、次第に陸游・楊万里流の通俗的な詩風に陥ったということと同じであり、これがさらに竟陵派に受け継がれていったのである。

彼の「剣南集の後に書す」（『曝書亭集』巻五十二）という跋では、「私はかつて陸游の詩語がはなはだ陳腐で、黄庭堅の詩語がはなはだ生硬であるのを不満に思ったことがある。生硬は蕭徳藻にひきつがれ、陳腐は楊万里が継承し

た。蕭の詩は伝わらず楊の詩は伝わったが、これを真似する人はいわば海辺で悪臭を追いかける（＝嗜好が偏っている）男のようなものだ」（予嘗嫌務観大熟、魯直太生。生者流為蕭東夫、熟者降為楊廷秀。蕭不伝而楊伝、效之者何異海畔逐臭之夫邪）と述べるが、「楊の詩は伝わった」とあるのが、陸游・楊万里の詩のもつ俗っぽさ・陳腐さの面が公安・竟陵派を経て伝わっていったことを示しているのではなかろうか。

このように考えてみると、「口を開けば楊陸に效い、唐音は総て歯せず」という「其十一」の二句は、朱と同時代の詩人について述べたことでありながら、実は公安・竟陵派の影響を深く意識した言葉と思われるのである。ただし、竟陵派の説の流行から、朱のこの詩が書かれた康熙四十三年までは、ある時間の隔たりがあるのであって[18]、「丁武選の詩集の序」（『曝書亭集』巻三十七）に、「ここ三十年ほど、詩を論ずる人たちは、竟陵派の邪説を憎むべきものであると悟り、かえって高棅の説に基準を求めた。このごろはまた唐詩人の杓子定規な形式を嫌い、争って宋を手本としている」（三十年来、海内譚詩者、知嫉景陵邪説、顧仍取法于廷礼。比復厭唐人之規幅、争以宋為師）と言うように、当時の宋詩流行に至るまでには、なお何度かの曲折を経たであろうことは勿論である。

五、「逸其軌」について

次に、第十四句の「逸其軌」の意味について考察する。

これは宋詩に対する平生の考えを述べた第三の部分の中にある。

第十三句に「東都、其の源を導く」というのは、前の第十一、十二句に「吾れ観る趙宋よりこのかた、諸家は一体に匪ず」とあるのを受けて、北宋時代に唐詩と異なる宋代独自の、諸家それぞれの詩のスタイルの源流ができあがっ

たことをいう。

問題は次の一句「南渡逸其軌」の解釈である。以前、私はここの「逸」の字は、立派にするという意味の動詞であると考え、一句を北宋期に出来上がった諸家のスタイルが南宋期にさらに発展していった意に解した[19]。しかし、ここは、楊謙の『曝書亭集詩註』(巻二十)に従えば、別の解釈がとられねばならない。

すなわち、楊謙の注は第十三、十四句に対して、厳羽の『滄浪詩話』詩弁篇より次の部分を引く。

国初(=宋代初期)の詩は、なお唐人の詩の形式を踏襲していた。すなわち、王禹偁は白居易に学び、楊億・劉筠は李商隠に学び、盛度は韋応物に学び、欧陽修は韓愈の古詩に学び、梅堯臣は唐詩人の平淡な部分に学んだ。蘇軾や黄庭堅になってはじめて自己の見解に基づいて詩を作り、唐詩人の影響を受けていた形式が一変した。……近ごろ趙師秀・翁巻といった人たちは、もっぱら賈島や姚合の詩を好み、次第にまた寒々とした苦吟調になった。天下の詩人は多くこのスタイルに倣い、その当時みずから唐詩の宗派と名乗ったが、これは禅でいう「声聞」「辟支」(=ともに悟の下位)の程度であるにすぎないことを知らず、とても盛唐の諸公のような「大乗の正法眼」(=究極の真理の段階)とはいえない。

(国初之詩尚沿襲唐人。王黄州学白楽天、楊文公劉中山学李商隠、盛文肅学韋蘇州、欧陽公学韓退之古詩、梅聖俞学唐人平澹処。至東坡山谷始自出己意以為詩、唐人之風変矣。……近世趙紫芝翁霊舒輩、独喜賈島姚合之詩、稍稍復就清苦之風。江湖詩人多效其体、一時自謂之唐宗、不知止入声聞辟支之果、豈盛唐諸公大乗正法眼者哉。)

楊謙の注の以上の引用をもとに二句の解釈を考えれば、具体的には蘇軾や黄庭堅が宋代独自の詩のスタイルを作り出したことが第十三句「東都導其源」の意味であり、従って第十四句に「南渡逸其軌」というのは、趙師秀、翁巻ら文学史上「永嘉の四霊」と呼ばれる南宋の詩人たちが、唐詩、とりわけ中晩唐詩の枯淡な作風に学び、蘇・黄が敷い

た宋詩本来の軌道から逸脱していったことを指す。ゆえにここの「逸」は、むしろ、あるべき道からそれる、はずれるという意味で考えなければならない。

楊注の引く『滄浪詩話』と対照してこのように解すると、この第十四句は、次の「紛紛として流派別れ、往往にして麁鄙なるに近し」という第十五、十六句と連なって、朱の南宋詩に対する批判的見解ととれる。このことを明らかにするために、ここで第十五句の「流派」が何を指すのかを確認しておく。

一つの考え方としては、ここの「流派」は唐詩か宋詩かの分野を指すものだとする解釈がある。[20] もしそうであれば、「流派」が「別れ」るとは、北宋の詩人が宋詩の本流を作ったのに対し、南宋に唐詩の流派が別にできたことを意味し、第十六句「往往にして麁鄙なるに近し」は、そのいずれもが粗野で下品であると批判することになる。しかし、宋詩人全体の批判ということになれば、第十七句以下で宋詩人を弁護するのと矛盾するうえ、朱の平生の詩学とも整合しない。すなわち彼は宋詩を一様に同じレベルで批判していたのではなく、その詩論としては特に南宋詩の、洗練されていない通俗的な一面を嫌っていたと思われるのである。[21]

このように考えると、「流派」はやはり、宋詩の諸流派でなくてはならない。朱の「序」の文に散見する「流派」の語は、主として宋詩人に関して用いられているが、[22] 加えて、彼の「汪祭酒の詩巻に題す三首」（其二）（『曝書亭集』巻十五）の詩に「西陵の十子は流派別れ、南宋の諸公は体製殊なり」という句が見える。「西陵の十子」は、朱と同時代の「西泠十子」と呼ばれる詩人の一派のことであるが、彼らとともに南宋の詩人たちが詩のスタイルによって派を分けているのがここでは批判的にうたわれている。その具体的状況を示すものとして楊注が引くのは、「大まかに言って、南宋においては古体では朱熹を第一にあげるべきであり、近体では陳与義の上に出る者はいない。この他にだいたい三つの分類がある。尤袤・楊万里らの四詩人は元和体であり、徐璣・趙師秀らのいわゆる永嘉の四霊は大中

体であり、劉克荘・戴復古らの諸詩人はすすんで晩宋のスタイルを作った。さらには謝翺の七言古詩も時に見るべきものがある」（大抵南宋古体当推朱元晦、近体無出陳去非。此外略有三等。尤楊四子、元和体也、徐趙四霊、大中体也、劉戴諸人、自為晩宋。而謝翺七言古、時有可采焉）という明の胡応麟の『詩藪』（雑編巻五）の記載である。「其十一」にいう「流派」は以上のような南宋の詩人の諸派を指すであろう。さらに楊注が引く明の長谷真逸の『農田余話』を見れば、「宋代は南宋以後、文のスタイルはばらばらに崩れ、詩のスタイルは格調が下がって繊弱になってしまい、ただ范成大と陸游のみがきちんとしていた。朱熹らが現れてはじめて当時の形式を一変させて昔の作品を模倣し、こうしたわけで彼らに『神頭鬼面』（＝新奇をてらうあまりにわざと不可解なものにする）という批判の語が存するのである」（宋南渡後、文体破砕、詩体卑弱、惟石湖放翁為平正。至晦菴諸子始一変時習、模仿古作、故有神頭鬼面之論[23]）とあって、これは朱の認識と必ずしも同じではないが、南宋の詩に蔓延していた通俗性、線の細さといった否定的側面をここにも窺うことができる。

以上のことから考えて、「其十一」の第十五、十六句において、「紛紛として流派別れ、往往にして麁鄙なるに近し」というのは、特に南宋詩に対する批判の語と思われるのである。従って、その前の一句「南都、其の軌を逸す」も、北宋期に敷かれたレールを脱線していった、ということを否定的な評価として述べているのでなければならない。

六、「群公」について

第三に、第十七句「群公皆な賢豪」の「群公」が指す範囲を考えてみる。これは第二の点と表裏一体の問題であるので、もはや多言を要しないであろう。

「群公」という語は、『詩経』大雅の「雲漢」に「群公先正」と見えるのと同様、多くのご先祖、というほどの意味で、ここでは、宋詩人を指す言葉には違いない。

但し、これまでの考察で明らかになった通り、朱自身は南宋の詩人に対して批判的であるから、詩に「皆な賢豪」という以上、蘇軾・黄庭堅以下の北宋の詩人を念頭に置いた言葉と思われる。そして、そうであってこそ「良に陳言衆きに由って、蹈襲は乃ち深く恥ず」という第十九、二十句の意味も理解できるのである。ここに「陳言」、言い古された言葉とか、「蹈襲」、前人の受け売りなどというのは、具体的には『滄浪詩話』にいう「国初」の詩について言ったことで、すなわち、蘇・黄以前の宋初の詩人が、依然として唐詩人の作り上げた諸形式の模倣に甘んじていたことを述べていると考えられる。[24] 蘇・黄らの構築した宋詩の形式は、こうした状態を「深く恥」じた結果のものと、朱は理解しているのである。ちなみに、彼の「沈明府の不羈集の序」（『曝書亭集』巻三十八）には、「君の詩は硬語をちりばめるのを喜び、人の真似をするのを恥じる」（君之詩、好盤硬語、恥蹈摹仿之跡）と書いて、沈（しん）なにがしという人物の詩を褒めている。ここに「硬語」というのは、朱の場合、黄庭堅の詩語を意識した評語であるから、[25] 陳腐な詩語の形式的な模倣の対極にあるものとして、少なくとも黄庭堅の詩は、この時期には評価されていることがわかるのである。

七、その他の十一首について

以上、「其十一」を解釈する上で、重要と思われる問題について論じたが、最後に十二首全体の中にこの作品を置いて考えるために、「其十一」以外の十一首に簡単にふれる。今、十一首すべてを取り上げる紙幅がないので、「其二」

「其四」「其五」「其六」「其十二」等、いくつかの特徴的な詩を中心に考察を加える。

「其三」は、『書経』の各篇のはじめにつけられた序について述べた詩で、その第五～第十句の中で、序が古くから存していたことを次のように主張する。

馬鄭は漆経に注し
大義已に此に及ぶ
古文未だ見われざると雖も
序先ず厥の旨を暢ぶ
云に何ぞ宋の諸儒
深文もて共に排毀せん

馬融と鄭玄は漆で書かれた『古文尚書』に注をつけ、こうして『書経』の大義は伝えられてきた。『古文尚書』が孔子の旧宅から出て来る前に序はすでに書かれていたのである。それなのにどうして、宋代の儒者たちは杓子定規にこれを斥けて認めないのか、というのがここでの朱の主張である。

楊謙の注によれば、詩に「宋の諸儒」というのは、具体的には、林之奇・林光朝・朱熹らを指し、すなわち、この「其三」の詩は、宋代の儒者たちが『書経』の序を孔子が書いたとは認めないのに対して、朱が抗議したものである。

「其四」は、仏教の説を真似たかのような宋の邵雍の学説に対する批判の詩である。いま、その第七～第十二句までを示す。

桑門　地と風に易うるは
其の説本と舛互す

奈何ぞ洛下の儒
聖を侮りて懼るるを知らざらん
三を用いて其の二を革め
一を変じて百悟を成す

「桑門」は、仏徒。「地と風に易う」というのは、仏教で「五行」のうち、土・金・水を地・風に変えて、物質を作る四つの元素を地・水・火・風とするいわゆる「四大」の考え方であって、この説はもともと五行と相容れないものである。「洛下の儒」というのは、河南出身の邵雍のことであるが、どうして彼は聖人を侮って懼れないのだろう。邵雍が五行の代わりに「火・水・土・石」を言うのは、五行のうち「水・火・土」の三つを用いて、「木・土」の二つを「石」に改めてしまったのであるが、これは一つだけ変えたようで、実は、そのために百の食い違いが生じている。……

詩は以上のように述べて、邵雍の説を斥けようとしている。

「其五」では、『詩経』衛風の「木瓜」の詩について、朱子の『集伝』が男女の贈答の詩であるというのを否定し、斉の桓公を称えたものとする。その第十九句から末尾までを次に掲げる。

木瓜は斉桓を美す
情豈に男女に係わらん
詩の教えは人倫を厚くし
淫を誨うること何ぞ独り許さん
怪しむべし上蔡の師

力を為すこと亦た太だ鉅し
芟棄す鄭衛の篇
竄改す雅頌の所
誰か異同を弁じ
復た箋伝の語に遵うことを為さん

斉の桓公を賛美した詩であるというのなどは、言うまでもなくいわゆる「小序」の立場に立ったもので、「人倫を厚くす」という「大序」の言葉も引用しながら、この詩では『詩経』の中には「淫詩」、すなわち淫奔の詩は存在しないとする。「上蔡の師」は、宋代、上蔡書院の先生であった王柏のことであって、彼は『詩経』三百篇の詩に対して、「鄭風」「衛風」の諸篇を淫詩として削ってしまったり、「召南」の詩を「王風」に移したり等々の改変を施しているが、朱はこれにも批判的で、つまるところ毛伝・鄭箋といった漢代の古注の語に従うべきであると主張する。

このように見てくると、朱はこくごとく宋代に出てきた説を斥けて、伝統的な古来からの説に依ろうとしているかのようである。さかのぼって、「其一」で、邵雍の先天の易・後天の易の説に疑問を呈し、「其二」で、周敦頤の「無極而太極」の説を批判的にとりあげるのは、『易』本来の考え方に帰ろうとするからあるし、あとの「其七」では、胡安国の『春秋胡氏伝』をとりとめのない説であると批判し、その書物を廃棄して『左伝』に基づくべきだと説いている。すなわち、こうした伝統的な昔からの学説に従おうとする立場が、特に『詩経』については、「其五」のように古注に準ずる解釈となるのである。

「其六」の詩で、「鄭風」「衛風」を淫詩とする朱子の説に反対するのも、古注を重んずるからである。例えば「鄭風」の「風雨」の詩は、「風雨淒淒たり、鶏鳴喈喈たり」、風雨の激しい夜にいつもと変わらず鶏が鳴いている、そして、

その声を聞きながら、「既に君子を見る、云に胡ぞ夷かならざらんや」、立派な君子に会えたなら心も安らぐのに、と思う詩であるが、これを「小序」が乱世において立派な君子がいないのを嘆いたものととるのに対して、朱子は男女の密会の詩とする。「其六」の第九、十句では、この「風雨」の詩について取り上げ、

鶏鳴風雨の夜
奔る者亦た危うかるべし

という。ここで、こんな風雨の夜に男のもとへ走る女性がいたらぶっそうだ、とうたうのは、朱子の解釈は成り立たないと言っているのであって、すなわち「小序」の説に依っているのである。

また、同じく「鄭風」に「遵大路」という詩がある。これは、「大路に遵って、子の手を掺り執る」、大道に従って追いかけて人のたもとに取りすがる、「我を悪むこと無かれ、故を寁にせざれ」、私を憎まないでくれ、ふるなじみの者を突然捨てないでくれ、とうたうものである。そしてこの場合も、「小序」は人民が君子を思う詩ととり、一方、朱子は男に捨てられた女性の言葉を述べたものとする。これに対して、「其六」の第十一、十二句では、

袪を執り大路に遵うは
豈に人の知るを畏れざらんや

つまり、そうした女性がいたとすれば人目を憚らないのも甚だしい、と言い、朱子の新注の想定をあり得ないこととして否定する。この詩の最後を朱が、

邪無し尼父の教え
用って童子の師に告げん

と結ぶのは、楊謙の注によれば、「思い邪無し」（『論語』為政篇）という孔子の言葉を前面に出して『詩経』には淫

詩は存在しないとした宋の呂祖謙と、逆に淫詩の存在を認めた朱子の論争を踏まえた上で、結局、呂の説を支持した、ということのようである。しかし、呂祖謙の説をとったということは、つまるところ、やはり、古注の立場を尊重しているのと同じである。

「其十二」は、明代の詩について年代を追って述べたものであり、いま、その後半部、第十五句以下を示す。ここには、「古文辞派」の七子以後の詩についての朱の持論が披露される。

嘉靖の季に泊んで
七子の言何ぞ夸れる
鉤金の縦い揀ぶべきも
黄河の沙を披くもの莫し
一たび咻しくすれば衆楚和し
是の後尤も卑哇
先公は鴃舌を聞き
頓に亡国の嗟きを生ず
吾れ正始に返さんと欲す
我を助くる者は誰ぞや

引用部分の大意は、以下のようなものであろう。

嘉靖年間（一五二二～六六）の末に及んで、七子の言は何と自信満々であったろうか。「鉤金」は帯の金具で、ここではきらりと光る文学の才能といった意で使われていると思われるが、たとえ発掘されるべきそうした才能があっ

ても「黄河の沙」をより分けて捜し出す人がいない。ここで「黄河の沙」とあるのは、七子のリーダー格である李攀竜の出身地が黄河流域の山東の歴城であることにひっかけた表現で、古文辞派一派を指す語であろう。そして、彼らが一たび喧しく喚くと、「衆楚和す」、すなわち、多くの楚の人々が唱和する。これは湖北公安県出身である袁氏三兄弟らの公安派のことで、それがさらに「是の後尤も卑哇」、下品でみだらな声になった、というのは竟陵派の流行を指すのである。曾祖父の朱国祚が、もずの鳴き声、つまり喧しいだけの意味の通じない音声としてそれを聞き、「亡国の音」だと嘆いた。以上が七子以後の詩に対する朱彝尊の見方であるが、これは「其十一」とも通ずる主張であろう。そして、類似するのはそれだけではなく、詩の末尾であって、「吾れ正始に返さんと欲す、我を助くる者は誰ぞや」、自分は詩のあり方を「正始」の道に戻そうと思う、自分に賛同してくれるのは誰だろうか、と結ぶ。

「正始」は、『毛詩』の「大序」に見える、「『周南』『召南』は正始の道、王化の基なり」に由来する語で、詩のそもそものあり方として、人倫の始めを正しくするための詩ということを述べるものである。こうしたことからしても、朱においては『詩経』の場合、「大序」「小序」に基づく古注の立場をとることしか考えられなかったのであって、このことは「其五」「其六」でも同じであった。それ以外の詩は、この立場を他の経典についても守ろうとしたことの主張であると思われる。[26]

八、結び

以上のことを踏まえて、「其十一」を再び眺めてみれば、この詩でもやはり、彼の主張の根本にあるのは『詩経』の詩のあり方で、すなわち、詩の末尾に「義始」と述べられる考え方である。これは風・賦・比・興・雅・頌という

「六義」と、風・小雅・大雅・頌の「四始」を合わせて言った言葉で、「六義」「四始」という「大序」に見える理論にここでも依りかかろうとしている。

そして、上述した厳羽や公安・竟陵派に対する批判も、つまるところこの立場から出てくるものであろう。朱がどうすれば『詩経』以来の本来の詩に帰れるかを考えた時にぶつかったのが、当代の詩人に如実に現れていた「空疎」という一点であり、それを学問を根底において克服することで、『詩経』三百篇の詩に近づこうとしたことが、彼の独自性といえるのである。

陳廷敬の作った朱の墓誌銘[27]に、「君(＝朱彝尊)は閑居すると、孫の稲孫に対して『およそ詩文を学ぶにあたっては、経・史の学問を根本としなければならず、そうしてはじめて古人の深遠な境地に深く入り込むことができる。空疎浅陋で、使い古された言葉を掠め取って借用しているような者で、詩文の作者と呼ぶに値するような人はいない。……』と言っていた」(君間居、謂其孫稲孫曰、凡学詩文、須根本経史、方能深入古人窔奥。未有空疎浅陋、勦襲陳言、而可以称作者。……)と見えるように、晩年の朱は、詩文を学ぶには、経学史学の学問を根本とし、「空疎」であってはならないということを孫の朱稲孫にも力説していた。それは彼が理想とする『詩経』の詩のあり方に到達するための方法であり、朱彝尊は特に「空疎」な竟陵派に影響された当時の詩の惨状を目の当りにしたことによって、そうした自己の主張に確信をもち、「斎中読書十二首」の「其十一」のような詩が作られたのである。

(一九九六年九月二日)

注

本稿は、平成八年度大塚漢文学会大会(一九九六年六月二十九日)において、「朱彝尊の『斎中読書十二首』について」と題し

て行なった口頭発表をもとに、その後修正を加えたものである。発表に対して貴重なご教示を下さった諸先生には、ここに心より御礼申し上げる。

(1) 『曝書亭集』巻二十一。

(2) 「斎中読書」という題名の詩は、早くは六朝宋の謝霊運の作品があり、『文選』巻三十（雑詩下）に収められている。

(3) 「其十一」に関する注釈として従来、次の三種がある。

王鎮遠『朱彝尊詩詞選注』（上海古籍出版社、一九八八年）八二～八四頁。

葉元章・鍾夏『朱彝尊選集』（上海古籍出版社、一九九一年）二二八～二三一頁。

拙稿「朱彝尊『斎中読書十二首』（其十一）訳注」（『言語文化論集』第三十五号、筑波大学、一九九二年）。

本稿は以上の注釈の成果を踏まえたものであるが、特に拙稿（以下「訳注」と呼ぶ）と異なる見解を生ずる部分については、のちに注記する。

(4) 胡薇元『夢痕館詩話』巻四に「此十二首為竹垞全集之冠、亦清朝三百年之冠」とある。

(5) 民国時代に出た清詩の総集である徐世昌輯『晩清簃詩匯』巻四十四に「斎中読書十二首足見平生為学宗旨、故備録之」と見える。

(6) 『銭研堂文集』巻二十六。

(7) 『射鷹楼詩話』巻五に「厳叟謂詩有別材、是矣。而謂詩非関学、則非也。謂詩有別趣、是矣。而謂非関理、亦非也。……垞翁詩、得作者之旨、真知言哉」とある。

(8) 『雪橋詩話続集』巻六参照。なお、『滄浪詩話』の引用部分は、『詩人玉屑』本では別の文に作る。

(9) 朱則傑『朱彝尊研究』（浙江古籍出版社、一九九三年）三七頁参照。

(10) 従って、ここで「空疎の人」が厳羽を指すことはあり得ない。かつて、「訳注」で「空疎」について、「ここでは、厳羽を謗って言うことばである」としたのは誤りである。

(11) この詩は楊謙の『朱竹垞先生年譜』では康熙四十五年に編年するが、朱氏前掲書一七五頁の説に従い、康熙四十四年の作

に改める。

(12) 「訳注」の「開口效楊陸」の注釈参照。

(13) 『静志居詩話』巻十八の譚元春の条には「充其意不読一巻書、便可臻於作者。此先文恪斥為亡国之音也」とある。

(14) 『静志居詩話』巻十七、鍾惺の条。

(15) 例えば、吉川幸次郎『元明詩概説』(岩波書店、一九六三年)二二四頁参照。

(16) 「王学士西征草序」(『曝書亭集』巻三十七)。

(17) 「葉李二使君合刻詩序」(『曝書亭集』巻三十八)。

(18) 『静志居詩話』巻二十二の李沂の条に「啓禎間、詩家多惑于竟陵流派」とあり、朱のいう竟陵派の詩体の流行とは天啓・崇禎年間のことと考えられる。

(19) 「訳注」参照。また、王氏前掲書もこの解釈をとる。

(20) 葉・鍾氏前掲書参照。

(21) 拙稿「朱彝尊における宋詩批判」(『言語文化論集』第三十三号、筑波大学、一九九一年)参照。

(22) 「訳注」の「紛紛流派別」の注釈参照。

(23) 『説郛』続弓十九に収める『農田余話』でもほぼ同文であるが、「始一変時習」を「始欲一変時習」に作る。

(24) この解釈は王氏前掲書の所説による。

(25) 拙稿「朱彝尊における宋詩批判」参照。

(26) なお、取り上げなかった詩のうち、「其八」「其九」は、孔子の七十二人の弟子の一人の公伯寮と後漢の大儒鄭玄を孔子とあわせて祭るべきでないとする論への反対意見を表すもので、「其十」は達意の辞を尊重し、いたずらに多くの言葉を費やすことを戒めたものである。これらの詩をどのように考えるかについては問題が残るが、そうした十二首全体の構造に関わる点は、また稿を改めて論ずることとしたい。

(27) 「日講官起居注翰林院検討朱公彝尊墓誌銘」(『碑伝集』巻四十五)。